

2025 Vol.26

GLOCAL



- ## ■中学生が選ぶ国際的な活動の一考察 ——教科書分析が示す国際化との関連から——

竹内 美都

- ロールシャッハ法は今後、衰退していくのだろうか
非臨床群への活用に関する検討

元木 幸恵

- ハルビン市における冰雪観光者の
行動パターンと傾向についての解析 ————— グホイチャン
- 『アステロイド・シティ』における古典ハリウッド映画的表现:
劇中劇「小惑星の町」の分析を通して ————— 白井 湧宇
- 儀礼から見る土岐氏と室町幕府の関係性 ————— 伊藤 優太
- 「元龜・天正年間における武田対織田・徳川の抗争」
——東美濃・西三河における動向—— ————— 塚本 仁

- 第22回「院生の力」を開催
- 第23回教員研究会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、GLOCAL Vol.26 をお届けいたします。

本研究科は、1991 年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998 年に創設された人文学部を基礎とする 2 専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が 2004 年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに 2008 年には歴史学・地理学専攻が加わり、4 専攻体制となって現在に至っています。

2025 年の日本は依然として自然環境の厳しさに直面し、体温を超える猛暑や記録的豪雨など、気候危機の深刻さを如実に示しています。これらは私たちに、人間社会の脆弱性と環境との持続的共生の必要性を改めて突き付けています。世界に目を向けると、ウクライナ戦争やパレスチナ情勢は依然として出口が見えず、台湾海峡や中東地域をめぐる緊張も高まっています。国際社会は対話と協調を模索しながらも、不安定な力学の中で揺れ動いているのが現状です。同時に、生成 AI をはじめとする新しい技術革新が急速に普及し、教育や研究の方法論そのものを大きく変えつつあります。

このような時代にあって、異文化や国際社会への理解を深め、国際的な視野をもって世界で活躍することができる人材が求められています。と同時に、多文化共生社会の実現のためには、自分が暮らすローカルな地域に目を向け、多様な人間や文化への深い関心が必要とされます。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

本誌は創刊から 13 年が経過し、この間、本研究科における日頃の教育・研究活動の一端を広く知っていただくために発行してまいりました。人文社会科学の幅広い分野を研究領域とする本研究科の特徴が表れた内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。

小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いに存じます。

2025 年 9 月 24 日

塩澤 正（中部大学大学院国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 准教授

竹内 美都 (TAKEUCHI Mito)

オハイオ大学大学院教育研究科博士課程修了。博士（学術）。広東外語外貿大学南国商学院東方言語文化学部日本語科副教授、岡崎女子大学子ども教育学部子ども教育学科講師を経て、2024年4月中部大学に着任。専門は教育社会学。多文化教育や多様性について研究をしている。著書に *A Case Study of "Othering" in Japanese Schools: Rhetoric and Reality* (2015, LAP Lambert Academic Publishing, 単著) など。



中学生が選ぶ国際的な活動の一考察 ——教科書分析が示す国際化との関連から——

はじめに

「カンボジアの地雷撤去とミャンマーの水問題への募金活動にご協力をお願いします」2008年1月、ある中学校の全校集会で、3年生の代表生徒がこう呼びかけた。これは、「総合的な学習の時間」で、「国際理解教育」を学ぶ3年生が考えた、自分たちにできる国際的な活動であった。筆者は、その後、他クラスでも募金活動をしたいという意見を多く聞いた。その一方で、通学区域にある公営住宅の外国人住民に対する活動を選んだグループはいなかった。

なぜ地域に住む外国人を対象にした活動案が出てこないのか？ 生徒たちは、教科書を参照しながら活動案を話し合っていたため、生徒たちの使用する教科書の中で、国際協力の情報が載っていた、社会（公民）（2006年発行、2005年検定済）と英語（2006年発行、2005年検定済）の教科書、道徳の副教材『心のノート』（2009年）の計3冊を調査対象として、記述の分析を行った。具体的には、「外国人」、「国際化」、「国際協力」、「国際連合（国連）」のキーワードに関連する記述と写真を調査した。本稿では、その4つの調査結果を報告し考察を試みる。

国連活動への支持

社会の教科書には、「もっと知りたい 国連の活動」（p. 162）のコラムがあり、国連難民高等弁務官事務所の緒方貞子氏の難民救済と、国連カンボジア暫定統治機構代表である明石康氏の国家再建の内容が写真とともに本

文で紹介されている。また、写真と写真に添えられた説明文に限られるが、戦後の日本もユニセフから学校給食や支援物資の援助を受けていたことが書かれている。なお、緒方氏が中学生に向けたメッセージは、『心のノート』にも記載されている。

共生の概念から、 外国への国際協力の強調

社会の教科書「身近な国際協力をしよう」（p. 156）の大見出しの中に、国際協力の定義として、「国際社会の平和と安定のために、世界の国々や人々を支援・協力すること」（p. 156）という記述があり、更に以下のとおり続く。「相手に対して自分ができるところをすることは、めぐまれない人々を救ったり、教えを授けたりすることではなく、ともに生きることを学ぶことではないでしょうか」（p. 156）。この最後の「ともに生きる」とは、共生の概念である。この共生は、早川・早川（2023）が4つに分類した共生の中の「インクルージョンとしての共生」にあたり、「多様な人々が互いに個性を認め合い、コミュニティにおいて包括的に参画する」（p. 98）ことを意味するであろう。

共生の観点から国際協力の必要性を説く内容は、英語の「Our Sister in Nepal」のユニット（pp. 20-24）にもみられる。バザー開催準備中の会話文が載っているのだが、バザーの目的はネパール人少女を支援するフォスター・プログラム（FP）の寄付の設定だ。バザー参加者向けのパンフレットには、少女が毎朝遠くの井戸に水汲みに行くために学校に

通えないことが書かれ、バザーを開催してFPの資金を集めたいと続いている。後日援助を受けた少女から中学生へお礼の手紙が届く。手紙には、支援のおかげで、自宅のそばに新しい井戸が設置され、少女は学校へ通学できるようになったこと、また両親も大人向けの授業で読み書きを学び、自宅と一緒に勉強することを喜んでいるという内容だ。

更にコラムでFPの紹介があり、「FPとは、発展途上国の子どものために、わたしたちが日本にいながらできる支援活動です。（中略）現地からはフォスター・チャイルドからの手紙ばかりでなく、毎年成長レポートやプロジェクトレポートも届きます。一方的にお金を送るだけの支援ではなく、文通などの心の交流を通して、ともに生きる世界をめざしています」（p. 24）と書かれている。ここでも「インクルージョンとしての共生」の概念が書かれている。

日本社会の同質性の維持

英語の教科書には、日本の文化や伝統を説明する英文が掲載されている。琉球の文化を代表する首里城や琉球三味線の写真がある一方、先住民族アイヌの文化については載っていない。それ以外は、マジョリティの日本人の食べ物や文化、スポーツ、年中行事などの紹介に限られる。

また、写真に着目して『心のノート』を見ると、日本の場面では、外国人は写真の中に入っていない。例えば、中見出し「公正、公平な態度で差別や偏見のない社会を」（pp. 102-103）には、22名の老若男女が2重の円にな

り、笑顔で上を見上げる姿を上から撮った写真があるが、全員が日本人と思われる。『心のノート』が発行された2009年当時、日本に長期滞在する外国人は、2,186,121人で、国籍・地域別の上位3か国は、中国、韓国・朝鮮、ブラジルの順だった（政府統計の総合窓口e-stat, 2009）。特に東アジア人は見分けがつけにくく、22名の中に中国人や韓国・朝鮮人がいる可能性は否定できない。しかし、日本が多民族国家であることを意図的に示す場合、上述の琉球民族やアイヌ民族、在日外国人やその子孫と識別できる人物が載っていても不思議ではない。そのような民族的多様性を示す写真や記述は、日本の場面では、他のページにおいても見当たらない。Tsuneyoshi (2007) は、2000年と2006年の小学校社会科の検定教科書の分析を行い、3～5年生の教科書の画像には、男子、女子、様々な年齢の日本人が登場するが、日本に永住する外国人の画像がないことを指摘している。

一方、場面設定が世界になると、日本人と共に外国人も写真に登場する。例えば、大見出し「世界の平和と人類の幸福を考える 私たちにできることを考えてみる」(pp. 128-129) には「国境をこえ、世界の国々で世界の人々に貢献する日本人がいる」(p. 128) と書かれている。青年海外協力隊やNPO・NGOのボランティア活動の紹介があり、「自分たちだけがよければいい、という時代ではない」(p. 128) と締めくくってある。ここでも国際協力の必要性が述べられている。

外国人住民に関する情報の不足

前述した社会の教科書の「身近な国際協力をしよう」(p. 156) には、中学生ができる国際協力の例がある。①外国への寄付（募金や未使用品の送付、資金集め活動）②途上国の製品を適正な価格で購入③留学生に対するボランティア活動の3つに分類できる。中高生が活動している写真の掲載もある。だが、③の対象は留学生であり、長期滞在または永住する外国人は想定されていない。この点は、小学校3～5年生の社会科教科書でTsuneyoshi(2007) が同様の指摘をしている。

では、調査対象の教科書に在日外国人の記述はないか、というそうではない。社会の教科書の中見出し「多文化共生をめざして」(p. 17) には、「日本に長くくらしている韓国・朝

鮮の人々に加えて、最近では、労働者としてラテン・アメリカやアジア出身の人々が特に増えています。国際化は、わたしたちの身のまわりで起こっているのです」(p. 17) と記載がある。

在日外国人に関連する写真も2枚ある。1枚目は「多文化・多民族と共生する街づくり（神戸市）」という説明文の写真で「神戸には歴史的に多くの外国人が住んでおり、市民とともにくらしています。写真はモスクを外国人と訪ねる市民の様子です」(p. 17) と書いてある。2枚目の写真は、「在日韓国・朝鮮人の児童と交流する日本の児童（大阪市）」(p. 17) という説明文とともに「旧正月にちなんだ、民族独特の遊びを楽しみました」という説明文があり、チマチョゴリを着た子どもたちがボードゲームのような遊びをしている。

従って、社会の教科書に限定されるが、在日外国人の情報も載っている。ただし上述の抜粋が全てである。

4つの調査結果のうち、「国連活動への支持」は社会の教科書と『心のノート』、「共生」の概念から、外国への国際協力の強調は、社会と英語の教科書と『心のノート』にそれぞれ記載があることと比較すると、在日外国人に関する情報は、量も質も圧倒的に不足していると言わざるを得ない。

おわりに

本稿の目的は、国際協力に関連する活動について、社会と英語の教科書と『心のノート』を分析し、中学生の多くが募金を選ぶ一方、地域に住む外国人に対する活動を選ばなかった理由を明らかにすることだった。その結果、4つのテーマが挙がった。

外国への国際協力は共生の概念から重要で、国連職員等日本人が世界で活躍する姿は、教科を超えて不可欠なテーマであった。一方、国内に目を向けると、道德の写真には、学校や日常生活に外国人はおらず日本人のみの同質的なイメージが固定化されていた。唯一、社会の教科書の「多文化共生」の中で、在日外国人の存在に触れてはいるが、その情報は限定的だった。実際、在日外国人に対する活動は、中学生が参加できる身近な国際活動の例にはなかった。

批判的教育学のマイケル・アップル氏によると、教育は「本質的に政治的なものであり、さまざまな集団が自分たちの文化、歴史、社

会正義のビジョンを制度化しようとする領域である」(2000, p. 11, 筆者翻訳) とし、教科書は、特定の集団の歴史や文化を学ぶことを正当化するオフィシャル・ノレッジ（公的知識）の例であるとする。

オフィシャル・ノレッジの枠組みの中で、調査結果の考察を試みると、募金活動は、生徒たちが教科書に書かれていた国際協力のテキスト（オフィシャル・ノレッジ）を学び、それを具現化したものと言えるのではなかろうか。生徒たちは、国際活動として、募金を「正しい」「標準的」な活動と理解する一方で、教科書等にも書かれていない内容（即ち、在日外国人に対する支援）は、授業を通して学ぶことはない。だからこそ、教科書の中に、在日外国人に関する内容を増やし、オフィシャル・ノレッジとし、学ぶ機会を設けることが求められる。

本研究では、社会と英語の教科書と『心のノート』の中で、国際協力の記述に関して4つの特徴を明らかにした。その一方で、中学生当事者が募金を選ぶ傾向が強く、外国人住民に対する活動案が出なかった理由について、教科書等の内容分析だけでは、データが不十分であることも露呈した。聞き取り調査で、中学生当事者の国際協力に対する考えを聞きその分析を追加することで、包括的な考察ができたのではないかと考える。今後の課題としたい。また、2025年度使用の中学校教科書と、同じテーマで記述や内容の比較分析を実施し、更に追究していきたい。

引用文献

- Apple, M. W. (2000). *Official knowledge: Democratic education in a conservative age*. (2nd ed.). New York: Routledge.
- 政府統計の総合窓口e-Stat(2009). 「在留外国人統計（旧登録外国人統計）登録外国人統計 国籍（出身地）別在留資格（在留目的）別外国人登録者（表番号99-01）」, <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147180&2025年8月27日アクセス>
- Tsuneyoshi, R. (2007). The portrayal of "foreigners" in Japanese social studies textbooks: Self-images of mono-ethnic pluralism. *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 2, (Dec.), 31-44. <https://doi.org/10.7571/eskyoku.2.31>
- 早川昌志・早川卓志(2023). 「4つの共生論：共生を『ともいき』『シンバイオーシス』『エコシステム』『インクルージョン』の4つの視点から整理する」『未来共創』10, 75-131. https://doi.org/10.50829/miraikyoso.10.0_75
- 文部科学省(2009)「心のノート 中学校」(改訂版), https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1302318.htm(2025年8月27日アクセス)



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 講師

元木 幸恵 (MOTOKI Sachie)

京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程満期退学。博士（教育学）。専門分野は臨床心理学。臨床心理士・公認心理師。心理検査、特に投射法の中でもロールシャッハ法を用いた心理的なアセスメントに関心がある。最近では、検査対象者を臨床的に問題がないと考えられる人々（非臨床群）に広げ、ロールシャッハ法とそのフィードバックの体験によって、ポジティブな心理的効果がもたらされることを実証的に示す研究を行っている。



ロールシャッハ法は今後、衰退していくのだろうか 非臨床群への活用に関する検討

人は人のことはわからない

心理学は、人が発生させる目に見えない現象を理解しようとするための学問である。その中でも臨床心理学は、患者／クライアントの内にある病める心に寄り添い、その生き方を理解していくことを目的としている。

しかしながら、どれほど患者／クライアントのことを理解しようと思っても、それは非常に困難でむしろ不可能な道のりであると言わざるを得ない。いくら心理臨床の大家と呼ばれる人であっても、研究者として際立った成果をあげている人であっても同じであると思う。どんな方法論を取ったとしても、結局、人は人のことはわからないし、自分のこともわからない。だからこそ知りたいと思うのだろう。

小児科医で精神分析家でもあったWinnicott（1958）が述べた「ほどよい母親good enough mother」というあり方に示されるように、完璧に赤ん坊（患者／クライアント）を理解することは難しく、時折、彼らからの要請に応えることに臨床家は失敗する。

私は、直感的に人の気持ちを理解することが頗る苦手であり、それゆえに人の気持ちやその人の生き方について何とか理解したいと思うことも多かった。臨床心理士養成課程の大学院生時代から、患者／クライアントと心理療法の中で出会っても彼らを理解しそこなうことばかりで、ほとんど人を理解することの難しさを痛感してきた。

人が人を理解しようとする営み

とかく臨床心理学は、人の心という目に見

えない現象を扱うがゆえに、その客観性・実証性についてしばしば疑いの目を向けられる。

私が臨床で考え方のベースとしている力動的心理療法ないし精神分析的心理療法は、治療者／セラピスト側の心を使って理解をするという非常に客観性に乏しい方法論である。

そのような教育を受けてきたためか、あるいは私のパーソナリティのためか、客観性や実証性よりも、個別具体性・物語性といった研究に注意・関心がどうしても向いてしまう。

私は、幸いにもいくつかの臨床領域で貴重な実践の経験を持つことができた。1つには医療領域で、なんらかの精神・身体症状を呈する患者に対する心理検査や心理療法の経験である。また1つには、学生相談臨床の経験である。こういった経験をいくつかの事例論文として提出し、博士論文として上梓をした。

しかしながら、少しばかり臨床経験を積んでも、事例研究としてそれなりに考察を施しても、患者／クライアントのことを本質的に理解できる感覚は抱くことができなかった。また、事例研究は実践の方法論が異なる臨床家にはほとんどその意味するところが伝わらないことを何度も体験することになった。

人が人を理解しようとする営みは、逆説的に人を理解できないことに直面する苦しい営みではある。しかし、理解できなかったとしても、理解しようとする試みこそが、患者／クライアントの心の痛みの最も深い部分に近接することができる方法であろう。それゆえ、患者／クライアントに対し、安直なタイプ論で決めつけない姿勢を治療者／セラピストは持ち続けて、簡単に理解してしまいたい誘惑に持

ちこたえなければならぬと思う。

臨床か研究か

人を理解しようとするほど、主観的な世界へと陥りがちとなるが、一方で研究という側面からすると、客観的で実証性を持った研究も同時に必要であると言える。世の中の潮流としてもそうだろう。

心理臨床の世界にいと、「臨床はするが研究はしない」という臨床家にかなりの数出会う。臨床活動で忙しいのもあるが、研究が臨床にどのように活かされるのか、わからないために研究を行わないという側面もあるだろう。

研究が臨床にどのように活かされるのか、という問いに答えるのは非常に難しいが、研究とは他者の目に自らが曝される行為であると思う。臨床は、ともすれば患者／クライアントとの二者関係に埋没しがちである。関係がうまくいっているときはよいのだが、何かまずいことが起きていたとしても、スーパーヴィジョンでも受けない限り気がつくことは難しい。他者の目が入るということは、批判され、自己愛が傷つくこともあるだろうが、その経験は自己愛を肥大化させず謙虚さを持った臨床家としてあるために生きてくると思われる。

「臨床か研究か」、といった二元論で語るのではなく、「臨床も研究も」行うことによって、患者／クライアントへ還元することができるのであろう。私が研究を行うのも、研究そのものを行いたいからなのではなく、臨床にその知見を活かしたいからである。それゆえ、実践の中で生じた疑問や困り感から研究が始ま

る。体系だった研究とはとても言えないが、実務家教員の端くれとして、そのような立場が変わることはないだろう。

臨床と研究の交点としての ロールシャッハ法

臨床実践の中で、患者／クライアントを理解するためのツールとして、心理検査がある。心理検査にはいくつかの種類があり、代表的なもので言えば知能検査や作業検査、パーソナリティ検査がある。それぞれ、患者／クライアントと会っているだけではわからない側面について数値など、目で見える形で共有することができる。

その中でも、ロールシャッハ法は賛否両論、議論を巻き起こしやすい心理検査の代表格である。ロールシャッハ法とは、インクをたらして偶然に出来た10枚の図版を用いたパーソナリティ検査である。図版がどのように見えるかによって、知覚の特性や対人関係のあり方、コミュニケーションのスタイルといった多面的な情報が得られる。

ロールシャッハ法では、被検者の反応をスコアリングし、それを数値化したり反応の流れを見たりする（継起分析）ことによってパーソナリティを推定するのであるが、非常に主観的であると一部で強い批判を受けている。加えて、その習熟には非常に時間がかかり、労力の大きい検査であることから使いこなせる人も少ない。小川・岩佐・李・今野・大久保（2011）の調査研究で明らかのように、ロールシャッハ法は臨床現場で使用頻度が下がっている。コストのかかる検査である割に、わかつて少ないと思われるのである。

しかし、ロールシャッハ法は被検者に対する非常に豊かな情報を与えてくれる。また、患者／クライアントもその情報について検査者とやり取りをする（フィードバック）ことで、自らの抱える問題に自覚的になり、自分自身についてもっと知りたいと思うようになるだろう。それは、2人の人（患者／クライアントと治療者／セラピスト）が人（患者／クライアント）のことをわかろうとする体験を創造する営みであり、人生の中で滅多にない出会いである。

ロールシャッハ法とそのフィードバックがもたらす情報は豊富である。そのことをもっと世に広めたい、というのが現在まで研究の動機となっている。

ロールシャッハ法の活用領域

ロールシャッハ法は、病院やクリニックなど、医療の分野で使用されることが多い。厚生労働省が毎年行っている「社会医療診療行為別統計」において、「知能・発達検査」の実施件数は年々増加傾向にあるが、ロールシャッハ法を含む「人格検査」はさほど増えてはいっていない。医療領域において相対的にロールシャッハ法の使用率は下がっていると言える。

日本ロールシャッハ学会の倫理綱領では、その前文において「常に自らの専門的な心理検査の実践業務及びその研究が人々の生活に重大な影響を与えるものである」という社会的責任を自覚することが求められている。この社会的責任のために、みだりにロールシャッハ法を施行することは現に戒められている。黎明期には、急にロールシャッハ法を施行するようなこともあったようである（河合、1995）。

私も基本的にはそのような倫理綱領は守るべきであると思っはいる。しかし、ロールシャッハ法に関する守秘義務、秘密保持義務によって、非常に限られた臨床領域でのみロールシャッハ法を実施すべきである、という解釈をするのは、ロールシャッハ法が今後、衰退していくことにつながる極端な話なのではないかと思う。ロールシャッハ法は、ロールシャッカーと呼ばれる一部の使い手には好んで使われるものの、先に述べたような習熟の困難さやコストの面から、これからますます使用率が低下していくことは想像に難くない。ロールシャッハ法の習得には職人技の側面がある以上、もう少し実践領域のすそ野を広げなければ、ロールシャッハ法に興味を持つ若手も減ってってしまうのではないだろうか。

そうであるならば、医療領域以外、すなわち臨床的に問題がないと考えられる人たちにロールシャッハ法を施行することの意味を見いだせれば、ロールシャッハ法を使用する人も増え、発展していく未来があるのかもしれない。

実証的な研究に向けて

上記の考えは、現状ではただの机上の空論である。臨床的な感覚としては、一般の人がロールシャッハ法を受検し、そのフィードバックを受けることによって、①自己理解が促進される②他者から深い理解を得られたことで漠

然とした不安が軽減する③自らの問題に自覚的になることで行動変容などポジティブな動きが活性化される、といったいくつかの効果が得られることが期待できるのではないかと考えている。

精神症状を呈さない非臨床群に対しては、別の心理検査を用いた活用事例が見られる（伊藤、2012など）。管理職の登用や新卒採用に関するアセスメントとして、心理検査の一種であるSCT(Sentence Completion Test) が用いられている。ロールシャッハ法を非臨床群へ用いた事例は、本邦ではほとんど見られないが、諸外国では一部で使用実績がある（Del Giudice, & Brabender, 2012など）。こういった先行研究における活用事例では、検査の結果が一方向的な評価・判定に用いられている。結果のフィードバックを受けて何かしらの影響があったかについては、検討がなされていない。

非臨床群の被検者に何らかの影響が生じることを示すためには数百人～千人単位の調査参加者が必要である。ロールシャッハ法の研究では、検査者・被検者の負担から、いくつかの研究を除いては大規模研究が行われてきていないのが現状である。

また、ロールシャッハ法とフィードバックが与える影響の中身については、これから臨床現場での実践経験をさらに積むことによって検討されなければならない。非臨床群での先行研究が世界的に見ても多いとは言えない中で、多面的にその影響については考慮する必要がある。今後、さらに検討していきたい。

引用文献

- Del Giudice, J. & Brabender, M. (2012). Rorschach assessment of leadership traits in college student leaders. *Comprehensive Psychology*, 1, 9-11.
- 伊藤隆一 (2012). SCT(精研式 文章完成法テスト) 活用ガイド 産業・心理臨床・福祉・教育の包括的手引. 金子書房.
- 河合圭雄 (1995). 臨床場面におけるロールシャッハ法. 岩崎学術出版社.
- 小川俊樹・岩佐和典・李貞美・今野仁博・大久保智紗 (2011). 心理臨床に必要な心理査定教育に関する研究. 研究助成報告書.
- Winnicott, D. W. (1958). The Capacity to be Alone. In: *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. London: Hogarth Press, pp. 29-36. (ウィニコット D.W. 牛島定信 (訳) (1977). 一人でいられる能力 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社 pp. 21-31.)



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 博士前期課程 2 年
グホイチャン (GU Huiqiang)

中国黒竜江省ドルボド・モンゴル族自治県出身。2021 年 7 月、内モンゴル大学モンゴ歴史学系観光管理専攻を卒業。2024 年 4 月に中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻に入学。現在はハルビンにおける冰雪観光を主な研究テーマとし、都市再生や地域振興における観光の役割について研究を進めている。



ハルビン市における冰雪観光者の行動パターンと傾向についての解析



はじめに

ハルビン市は世界三大冰雪祭りの開催地の一つで、豊富な冰雪観光資源を有しているが、かつては観光サービスの意識が低く、ぼったくりなどの問題が頻発し、都市イメージは悪化していた。しかし近年、ハルビン市政府は観光資源の再整備や、市民・民間の協力体制の構築を進め、旅行環境を大幅に改善したことで、観光者数と観光収入の急速な回復と成長に成功した。現在では年間1億人以上の観光客を受け入れ、その約80%が12月から2月の冰雪観光ピーク期に集中しているにもかかわらず、オーバーツーリズムは発生していない。市民の親切さや高い観光満足度がSNSを通じて広まり、都市ブランドの向上にもつながっている。

こうした背景を踏まえ、本研究ではハルビン冰雪観光における観光客の行動特性とサービスの質に関する情報を明らかにすることを目的とし、アンケート調査を実施した。調査は2025年1月20日から25日にかけてオンラインおよびオフラインで配布・回収を行い、有効回答数は108件であった。調査対象はハルビンの冰雪観光を体験した観光客であり、旅行動機、観光サービスの満足度（文化的雰囲気・交通・インフラ・飲食・サービスなど）、支払意思・旅行予算、推薦意思・再訪意思、情報源の5つの側面から質問項目を構成した。

アンケート調査結果のデータ分析方法

アンケート調査で得られたデータはSPSS統計ソフトを用いて分析した。単一選択項目

については記述的頻度分析を行い、観光客の基本的な傾向を把握した。複数選択項目に関しては多重応答分析を用い、複合的な選択傾向や関連性を明らかにした。また、観光サービスに対する満足度項目についてはリッカート尺度を採用し、信頼性および妥当性を検証したうえで評価を行った。これにより、観光行動やサービス評価に関するデータの精度と分析結果の信頼性を確保した。

ハルビン冰雪観光アンケート調査データ概要

本アンケート調査の概要は以下の通りである。旅行者は4年制大学以上の高学歴層が66%を占め、職業は学生、会社員、フリーランスが中心で、月収は3000～8000元の中所得層が多数を占める。訪問回数は初回47%、リピーター53%で、滞在期間は日帰り33%、2～5日64%、6日以上3%と短期旅行が主流である。旅行形態はセルフツアーが最も多く（41.7%）、団体旅行（33.3%）や自家用車旅行（20.3%）が続く。人気の観光資源は冰雪彫刻（87%）、欧風建築（69%）、夜間イベント（77%）で、グルメ体験やスキー、文化体験にも高い関心が示された。文化的雰囲気（73%）、インフラ（71%）、サービス（73%）への満足度は高く、97%の旅行者が予想を超える体験を得たと回答している。情報源は友人の紹介（82%）とSNS（72%）が中心で、伝統的メディアの影響は限定的であった。また「雪と氷のレクリエーション」「スペシャルティ・ケータリング」「文化体験」への関心が高い一方、特産品な

ど物産系消費は比較的低調であった。

選択肢	度	数	%	標準偏差	分散
ハルビン冰雪観光の推薦意向	はい	107	99%	0.09	0.009
	いいえ	1	1%		
ハルビン再訪の意向	はい	106	98%	0.13	0.018
	いいえ	2	1%		

図1 ハルビン市観光者推薦意向の頻度分析
筆者によるSPSS分析結果

まとめ

ハルビン市の旅行者は主に4年制大学以上の高学歴で中所得層が多く、文化体験に強い関心を持つ。SNSなどのUGCが主要情報源となり、従来のメディアを大きく上回っている。観光客は文化的雰囲気や景観、サービスに高い満足を示し、再訪意欲や推薦意向も非常に高い。

冰雪レクリエーションやヨーロッパ風建築、民族文化への関心が強く、観光動機は自然環境と都市文化の融合に基づく。ハルビンの魅力は雪氷資源に加え、独自の都市景観と歴史文化に支えられている。

観光消費は体験型に偏りがちで、お土産開発やマーケティングの改善が求められる。冬季の寒さに対応した交通インフラやサービスの充実も課題である。

引用文献

ハルビン市政府文化広報観光局（2023）「第14次5カ年計画文化観光発展計画」ハルビン市人民政府HP。
ハルビン市人民政府（2023）「ハルビン冰雪文化首都（冰雪経済）の発展計画（2022～2030年）に関する通知」ハルビン市人民政府HP。



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 2 年

白井 湧宇 (SHIRAI Yu)

2002 年愛知県豊川市生まれ。2024 年中部大学大学院へ進学。卒業論文は映画監督スティーブン・スピルバーグの長回し技法に着目し、全作品のショット時間を計測し、長回しが物語とどう密接しているのかを研究した。修士論文ではウェス・アンダーソン監督『アステロイドシティ』（2023）の物語構造を分析する。



『アステロイド・シティ』における古典ハリウッド映画的表现：劇中劇「小惑星の町」の分析を通して

はじめに

ウェス・アンダーソン監督の映画『アステロイド・シティ』（2023）は、舞台劇「小惑星の町」の制作過程と舞台上演を示しながらもその劇を映画として表現している。映画内では制作過程に該当すると思われる部分をテレビ番組で放映し、舞台を模した映画と制作裏の同時進行という二層構造が採用されている。この複雑な物語性を分析し、なぜこの形式を採用したのかを考察していくことで、ウェス・アンダーソンの物語構造を明らかにする。本稿では劇中劇「小惑星の町」の物語構造について紹介していく。

ナラティブの定義について

ボードウェルとトンプソン（2007）は、時間と空間の中で生起する因果関係をもつ出来事の連鎖をナラティブと定義する。ナラティブは一般に、ストーリーとプロットという二層から成り立ち、さらには「物語言表（レシ）」「物語内容（イストワール）」「物語叙述（ナラシオン）」という三つの具現域を用いる。本論は、物語言表（レシ）つまり映像、音声、構成などの表現レベルを手がかりとして、どのようにして物語内容が構築されているのかを考察する。

物語構造の特徴としてターナー（2012）は、均衡（平常な状態）が崩れ、不均衡な状態となり、それに抗する強力な行動によってのみ再び均衡が回復されると述べた（ターナー 2012 pp. 109-138）。

「小惑星の町」においては、平和な町の均衡が宇宙人の襲来、そしてアメリカ政府による隔離によって崩壊するが、最終的には隔離された人々の反乱によって、物語は元の状態へと回帰していくのである。

また、「小惑星の町」は、古典ハリウッド映画と呼ばれる1930年代～60年代のハリウッドで製作された映画の物語構造に忠実な物語性を持つと考察する。

劇中劇「小惑星の町」

『アステロイド・シティ』は、古典ハリウッド映画の構造を踏襲しつつ、それを極限まで縮小化した物語である。

舞台はネバダ州砂漠の町。冒頭、弾道ミサイルの輸送や原爆実験、ジュニア宇宙科学大会の発明品が対ソ連兵器化される背景が描かれる。

天体観測中に突如UFOが現れ町の象徴である隕石を奪取、主人公オーギーのみが宇宙人を撮影する。この事件を契機に町は米政府により封鎖され、住民は隔離・統制下に置かれる。政府を最大の敵とし、天才キッズが外部連絡を試みる反乱が展開される。宇宙人は危害を加えず隕石を返すだけの存在である。つまり宇宙人は映画のマクガフィンとして機能すると考える。

またジャンルの特徴としてSF、西部劇、メロドラマなど1950年代のハリウッド映画を代表するジャンル映画への敬意が込められていると考察する。ウェス・アンダーソンは、ジャンルの背景を描写全体に強く影響させ、自分

なりの模倣をしていると考察する。ただ、この劇中劇「小惑星の町」は壮大なSF映画のように作られているが、提示されているのはあくまでミニマムな物語世界である。アンダーソンは、古典ハリウッド映画的な物語を参照しながらも、あくまで架空の演劇であることを観客に示唆している。

おわりに

本稿では劇中劇「小惑星の町」の物語構造について紹介した。今後、修士論文では制作過程が描かれる舞台裏の物語構造とテレビ番組としての放映形式について考察していく。

このテレビ番組的枠組みは、物語の現実性を揺るがすだけでなく、観客の没入を巧妙に妨げる仕掛けとして機能しており、『アステロイド・シティ』の入り組んだ二重構造を読み解く鍵となる。今後もその物語構造を多角的に分析していく予定である。

引用文献

- オーモン、J ベルガラ、A マリー、M ヴァルネ、M 著 武田潔訳（2000）第3章「映画と物語」『映画理論講義』勁草書房 pp. 107-185
- ターナー、グレアム著 松田憲次郎訳（2012）『映画における物語』『フィルム・スタディーズ 社会的実践としての映画』水声社 pp. 109-138
- ネイサン、イアン 鳥内哲朗訳（2022）『ウェス・アンダーソン：旅する優雅な空想家』フィルムアート社
- バーゴイン、ロバート著 丸山修訳（2006）『映画物語論』『映画記号論入門』松柏社 pp. 165-173
- Seitz, Mat Zoller (2025) *The Wes Anderson Collection: Asteroid City* Abrams Books



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程2年
伊藤 優太 (ITO Yuta)

2000年8月11日生まれ。三重県桑名市出身。2024年3月に、愛知文教大学 人文学部・人文学科を卒業。同年4月に、中部大学大学院国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻に進学。専攻は、日本中世史。修士論文では、「儀礼から見る土岐氏と室町幕府の関係性」というテーマで室町幕府における土岐氏の位置づけを儀礼から試みている。



儀礼から見る土岐氏と室町幕府の関係性



はじめに

土岐氏の研究は、1960年代以降、佐藤進一氏等をはじめとする研究者が様々な観点から考察し、着実に蓄積されつつある¹。

しかし、儀礼の面において土岐氏の立場を検討する専論は管見に及ばず、検討の余地が大いにあると考える。そこで本稿では、文明18年(1486)7月29日に行われた足利義尚右大将拝賀式から土岐氏と室町幕府の関係を考察し、儀礼における土岐氏の立場について検討していく。

右大将拝賀式から見る土岐氏

まず、右大将拝賀式とは、足利将軍家が朝廷に対して臣臣である事を示す行事であると同時に将軍の代替わりを喧伝する一大セレモニーでもあった²。また、朝廷に対して感謝する儀式でもあったとしている。とりわけ、一騎打である管領・畠山氏・佐々木氏・富樫氏・土岐氏が重要な役割を担ったとされる。そうした中で、土岐氏が右大将拝賀式に初めて供奉したのが、康暦元年(1379)7月25日の足利義満右大将拝賀式の供奉である³。この時、布衣馬打を土岐詮直が勤めている。この布衣馬打とは、狩衣を着て騎馬する幕府の武士とされている⁴。また本来であれば、土岐氏の当主である土岐頼康や守護代である土岐直氏が勤めていそうなものだが、直氏の子である詮直が勤めているのも興味深い。なぜなら、他大名は何れも当主が務めているからである。おそらくこれは、以前に義満が頼康を討伐しようとした事が考えられる。

次に、史料から確認できるのは永享2年(1430)7月25日の足利義教右大将拝賀式である⁵。この時は、当主である土岐持益が一騎打として供奉している。

続いて、康正2年(1456)7月25日に開

催された足利義政右大将拝賀式は、土岐成頼が一騎打として参陣しており五番の後陣を務めている。本来、五番は管領が務めるところとされるが、義政期では伊勢氏が新たに入り込んだ事から土岐氏が五番の後陣を管領の代わりに担っている。この事は、土岐氏にとって誉れであろう。理由は、土岐氏は「御一家(足利一門)の次、諸家の頭」と説かれているからである⁶。

しかし文明18年(1486)7月29日の足利義尚右大将拝賀式では、五番の後陣に土岐氏の名が無く土岐氏は不参のまま右大将拝賀が行われている。実際、『大乘院寺社雑事記』文明18年7月29日条でも確認したが土岐氏不参で行われている⁷。その原因は、『家中竹馬記』に記載されている⁸。それによれば、「右後陣之供奉如先例。当方被仰出之處。去明応九年(文明9年カ)十一月十一日諸家京都之御陣を退き。各分国に御下向以来。瑞龍寺殿(成頼)。濃州に御在国あり。先年慈照院殿御拝賀之時御存知之儀なり。当時は難調敷。御延引有るべき様に御油断有處に。御拝賀既に御治定之由注進の間。御遅延に及べり。誠に御越度之由被仰候也。然共後陣の供奉。土岐ならでは参勤之先例なしと後陣をあげをかれたり。(以下略)」としている。つまり、足利義尚は先例の如く土岐氏に右大将拝賀式の供奉を勤めるように要請したが、文明9年11月11日には応仁の乱が終結し諸家は京都の陣を退き各分国に帰還しており土岐成頼も美濃国に在国していた。そうした中で、右大将拝賀式が延引されると噂されており成頼が油断している所に、既に右大将拝賀式が決定したと報告され成頼の返事が遅れた為、義尚が土岐氏ならでは参勤の先例なしとし、後陣をあげおかれたとする。その後、「長享元年九月十二日江州南部に御勤座時。御参陣有て上意前々のごとく也。今度後陣あげをかれる事。先規被召召。上意誠忝御事。御面目之至也。」としており、義尚は六角氏退治の際にも五番

の後陣を置いておくとしている。この事から、土岐氏にとっては供奉を放棄したにもかかわらず義尚は土岐氏の為に後陣をあげおかれただけでなく代役も立てられていない。故に、將軍による土岐氏への配慮が窺える。

一方の、土岐氏も供奉には参陣しなかったものの献金や進上を行っている⁹。また、六角氏討伐の際には土岐成頼・政房が参陣する等幕府に奉公する姿勢を見せている。

小結

以上のように、土岐氏は、足利義満・義教・義政の右大将拝賀式の供奉に加わっており、そのような中で、義政期は管領に代わり五番の後陣を務めた。また、足利義尚の右大将拝賀式は不参したものの五番の代役を立てられていなく、それなりに将軍から配慮されている。これらの事から、儀礼から見る土岐氏の立場は更に評価する必要がある。

引用文献

- 1 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究 上』(東京大学出版会、昭和42年)、秋元信英「土岐一族の抬頭」(『国史学』、75号、昭和42年)等
- 2 苫居研太「加賀富樫氏と室町幕府」(『大阪公立大学大学院研究科都市文化研究センター』26号、令和6年)
- 3 『花宮三代記』(『群書類従』16輯(続群書類従完会、昭和7年))
- 4 桃崎有一郎『室町の覇者足利義満』(筑摩書房、令和2年)
- 5 『薩戒記』(『大日本古記録』(東京大学史料編纂所、平成25年))
- 6 『家中竹馬記』(『群書類従』23輯(続群書類従完会、昭和7年))
- 7 『大乘院寺社雑事記』(角川書店、昭和39年)
- 8 前掲註6書
- 9 「足利義尚任大将祝賀脚進納注文」(『蜷川家文書』、『戦国遺文 土岐・斎藤氏編』99頁(東京堂出版、令和5年))、前掲註6書



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程2年
塚本 仁 (TSUKAMOTO Hitoshi)

昭和28年生まれ。岐阜県土岐市出身。昭和51年明治大学文学部卒業。社会人を経て令和6年4月、中部大学国際人間学研究科歴史学・地理学専攻課程へ入学。専攻は日本中世史。とりわけ地域の戦国史は未解明な部分が多く、伝承や遺構は残るが、確たる実証が少なく研究の進展がみられない。今回天正3年(1575)の「長篠の戦い」につながる西三河賀茂郡における武田・徳川の抗争、その前段階となる東美濃地域における武田・織田の抗争から、武田の動向、さらには侵攻の目的を明らかにする。



「元亀・天正年間における武田対織田・徳川の抗争」 ——東美濃・西三河における動向——

はじめに

天正三年(1575)五月に起きた「長篠の戦い」は、多くの先行研究があり今でも研究は積み重ねられている。甲斐武田勝頼の戦いの目的も三河への侵攻で概ね一致している。

さらに武田軍は徳川家臣の大岡弥四郎の謀反に乗じて、岡崎を目指すものの、その謀反の末遂から結果的に長篠で戦うことになったわけだが、その勝頼隊とは別に賀茂郡足助経由で岡崎へ向かう武田軍があった。その動向についてはほとんどわかっていない。これらについては同時代資料と後世史料が混在しており、真実が見えづらくなっていることが原因の一つであると考えられる。

東美濃への侵攻

天正二年(1574)一月から武田軍が東美濃地方にやってきて、前年から武田方となっていた岩村城を拠点に織田方の遠山十八城をことごとく落とし、さらにあわせて東美濃地域の多くの神社・仏閣に火を放った。しかしながら現在一次資料で確認できるのは、岩村、明智の落城、そして付近の小城のいくつかである。現在までに調査しただけで五十に及び小城・砦、神社などや戦いにまつわる伝承は、後世資料や地域に伝わった口伝などが中心であり、非常に解明の難しい部分である。それらの多くは増幅されたり、英雄譚として美化され、実態がほとんどつかめない。

武田は地域の国衆を調略して領土の拡大を図っている。例えば永禄以前の恵那・中津川は、南信濃の小笠原氏や木曾氏による影響力が強

められている。当時の東美濃西部の動向は、いま一つはっきりしないが、武田の影響力が及んでいたと考えられ、永禄八年、織田信長がようやく美濃を手中に収めた頃から、東美濃も織田、武田の力のバランスのもとで両属する状態になった。その均衡が破れ、また武田の三河侵攻の前哨基地としての役割を与えられたかに見える東美濃侵攻の、多くの伝承等の事実関係を調査している。

三河国賀茂郡侵攻から岡崎へ

天正三年四月中旬から賀茂郡の足助城が攻撃され、それに伴い近辺の小城も落とされた。それは、この攻撃を担当したとされる武田の武将山県昌景や武田勝頼の文書から確認できる。しかし、ではなぜ足助を攻撃したのか。その目的も明確にされておらず、先行研究からもほとんど言及されることなく軽く触れられた程度になっているか、足助を経由して長篠の一大決戦に臨む通過点的な扱いである。判明する事実だけを見れば、そのようにとらえざるをえない。

現在の新修豊田市史をはじめ旧足助町誌などの当該部分は、後世史料に立脚して書かれていると思われる。その資料は「嶋村家根元慶図記」と呼ばれる、豊田市内嶋村家に伝承した慶図記で、地元神社との関わり、また天正二年の賀茂郡における武田軍の動向などの記述がある。特に本慶図記の主人公ともいえる人物と、武田武将のやり取りは、リアルに描かれているしそれに伴う遺構なども地域に伝存する。

これら二次史料の取り扱いには迷うところではあるが、例えば、「天正二年に山県昌景がやってきた」の部分とか山県軍が岡崎へ侵攻する際、

桑原を経由した点などは、東美濃の天正二年の明知との関係や、多くの研究者が武田の岡崎侵攻を検討する際、大岡弥四郎との関係性を持ち出す根拠となる後世史料である「岡崎東泉紀」や「伝馬町日記」との整合が一部にみられる箇所もあることから、あくまでも参考資料として取り扱い、必要部分を検証して事実関係を築き上げていくことが現実的かと考える。

本研究の目的は、天正二年から三年にかけて東美濃、西三河賀茂郡と立て続けに起きた武田軍の侵攻が、関連性を持って語られるべき出来事であり、これらの動きを少しでも明確にすることである。

おわりに

今日まで東美濃と西三河賀茂郡との当該時代の関連性についての研究は、ここまで知り得ていない。それぞれが別々に語られてきたためである。今回取り組んでみて、現存資料の少なさや一次資料である文書の年次比定などが、今日まで研究を遠ざけてきた原因でもあった。

こうした観点からすると、設定した目標を達成するにはかなりの労力が必要となるが、東美濃や賀茂郡に今も伝わる伝承の中から少しでも事実関係を探し出すことが課題であり、現在はその研究作業に傾注しているところである。

参考文献

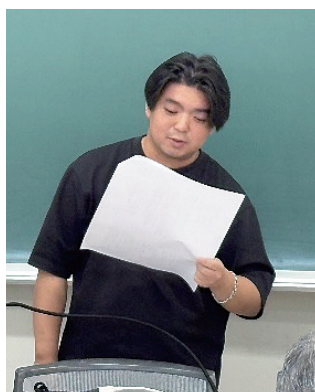
- ①新修豊田市史2通史編(令和2)・同6資料編(平成9)、
- ②愛知県史資料編10(平成21)・同11(平成15)、
- ③土岐市史(昭和45)、④瑞浪市史(昭和49)、⑤恵那市史(昭和58)、⑥中津川市史(昭和43)、⑦岩村町史(昭和57)、⑧明智町史(昭和35)、⑨足助町誌(昭和50)、
- 旭町誌(昭和56)、⑩天正三年武田勝頼岡崎攻落作戦村岡幹生(岩田書院 令和5)、⑪戦国大名武田氏の外交と戦争 小笠原春香(岩田書院 平成31)など

第22回「院生の力」を開催

第22回「院生の力」研究報告会が2025年7月3日に開催された。院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうことが主な目的である。また、指導教授がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場としても位置づけられている。

今回は国際関係学専攻、言語文化専攻、歴史学・地理学専攻の博士前期課程所属の院生4名（顧慧強氏、白井湧宇氏、伊藤優太氏、塚本仁氏）が発表をおこなった。テーマは、「ハルビン市における冰雪観光者の行動パターンと傾向についての解析」「『アステロイド・シティ』における古典ハリウッド映画的表現：劇中劇「小惑星の町」の分析を通して」「幕府儀礼から見る土岐氏と室町幕府との関係性」「元亀・天正年間における武田対織田・徳川の抗争 一濃地域・西三河における動向一」と多岐にわたり、いずれも興味深い発表であり、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。

参加者はここ数年で最も多く、38人（院生14人（発表者4人含む）、学部生9人、聴講生1人、教員12人、事務員2人）の参加があった。質疑応答も活発になされ、たいへん実り多い報告会となった。また、報告会終了後には同じ会場で交流会を開催した。学部生の参加もあり、専攻や教員・院生・学部生の枠を越えた有意義な交流機会となった。



大学院 国際人間学研究科 主催
第22回研究報告会
院生の力

大学院生が、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

2025年7月2日(水) 15時20分～17時00分
2533 講義室(25号館3階)
※終了後、交流会を開催予定。

15:20～15:45 顧 慧強 (国際関係学専攻 博士前期課程2年)
発表題目：ハルビン市における冰雪観光者の行動パターンと傾向についての解析
コメンテーター：羅 立新 講師(国際関係学専攻)

15:45～16:10 白井 湧宇 (言語文化専攻 博士前期課程2年)
発表題目：『アステロイド・シティ』における古典ハリウッド映画的表現：劇中劇「小惑星の町」の分析を通して
コメンテーター：小川 順子 教授(言語文化専攻)

16:10～16:35 伊藤 優太 (歴史学・地理学専攻 博士前期課程2年)
発表題目：幕府儀礼から見る土岐氏と室町幕府との関係性
コメンテーター：水野 智之 教授(歴史学・地理学専攻)

16:35～17:00 塚本 仁 (歴史学・地理学専攻 博士前期課程2年)
発表題目：元亀・天正年間における武田対織田・徳川の抗争
～東濃地域・西三河における動向～
コメンテーター：水野 智之 教授(歴史学・地理学専攻)

第23回教員研究会を開催

第23回 国際人間学研究科教員研究会は2025年7月23日の研究科委員会終了後に二人の発表者を迎えて開催された。まず、言語文化専攻英語圏言語文化コースの竹内美都准教授が「中学生が選ぶ国際的な活動の一考察 ―教科書文責が示す国際化との関連から―」と題する発表を行った。氏は中学生の国際協力活動の選択を分析し、募金は教科書に基づく標準的活動とされる一方、在日外国人支援は扱われず、教材改善の必要性を主張された。

次に、心理学専攻の元木幸恵講師が「自己理解による心的変容」と題する発表を行った。氏によ

れば、ロールシャッハ法は医療領域での使用が減少傾向にあり、非臨床群への活用が発展の鍵とされ、今後は大規模研究を通じ効果検証が求められるという。詳細は本冊子の4ページと6ページから始まる報告をご参照されたい。新進気鋭の二人の研究者による知的刺激に満ちた発表のあと、活発な質疑応答が行われた。参加者は合計32名（教員30名、事務員2名）であった。



中部大学国際人間学研究科 主催

資料6

第 23 回教員研究会

2025 年 7 月 23 日（水）

研究科委員会終了後（17 時 45 分頃～）

2821 講義室（28 号館 2 階）

竹内 美都 准教授 言語文化専攻 英語圏言語文化コース

中学生が選ぶ国際的な活動の一考察
―教科書分析が示す国際化との関連から―

元木 幸恵 講師 心理学専攻

自己理解による心的変容

院生・学部生の来聴を歓迎します。

42

入試情報

博士前期課程・後期課程 分野・コース

中部大学大学院国際人間学研究科では「国際」と「人間」をキーワードに、グローバルとローカルの2つを軸足として活躍できる人材を育てています。具体的には以下のような政治、経済、社会、文化、言語、心理、歴史、地理などの分野で、63名の教員が指導学生の学位取得に向けて全力でサポートします。全ての分野に博士前期課程・後期課程があり、両課程とも以下のようなコースがあります。全ての大学院生に研究費を支給いたします。海外での研究発表や海外研究指導委託支援なども積極的に支援しています。指導教員の専門分野などについては、研究科のウェブページをご覧ください。

専攻	分野	専攻	分野
国際関係学	国際政治経済	心理学	心理学
	国際社会文化		歴史学
言語文化	情報社会	歴史学・地理学	地理学
	英語圏言語文化		
	日本語日本文化		

入試情報

本研究科の入試情報をお知らせいたします。試験日程は10月（受付終了）と2月（2026.2.21）、出願期間は12月6日～1月8日です。一般試験、社会人試験、留学生試験の3種類があり、基本的に、書類審査、筆記試験（専門科目・外国語能力を含む）及び面接試験による総合評価で可否を判定いたします。詳細は、右のQRコードより2026年度中部大学大学院入学試験要項をご覧ください。入学試験要項および各種提出書類（研究計画書、論文要旨等）は、ウェブよりダウンロードしてください。入学試験要項、パンフレット等の印刷物はありません。各試験はインターネットによる出願となります。



入学試験要項



申請書類



研究科総合情報



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋して、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/健康心理学特論/認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/心理検査法特論/心理統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

情報社会コース

研究基礎(情報収集/メディア・クリティシズム)/現代社会特論/情報社会特論/情報文化特論/現代メディア特論/情報コンテンツ制作特論/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通科目

近代世界表象体系

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

情報社会専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

※各専攻での深い学修に加え、高度な俯瞰力や豊かな人間性を備えたリーダー人材の育成を目指した「持続社会創成教育プログラム」を入学時に選択することも可能です。

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：塩澤 正
 - 発行日：2025 年 10 月 22 日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
 - 中部大学国際人間学研究科(人文学部事務室)
 - 電話：0568-51-4144(直通)
 - 電子メール：chubu-inkn@fsc.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
<https://www.chubu.ac.jp/academics/graduate-global-humanics/>